

アジアに届け！空飛ぶ車いす 2013 in Thailand Flying Wheelchair Supporters 活動報告

新潟医療福祉大学 義肢装具自立支援学科・

藤枝温子, 前田雄, 須田裕紀

新潟医療福祉大学 Flying Wheelchair Supporters・

佐藤駿一, 静悦嗣, 川上裕之, 天井仁美, 石川由佳子,

井上捷太, 上村佳世, 栗栖亜実, 中野雅之, 山口泰平

【はじめに】

「空飛ぶ車いす」とは、1999年に公益財団法人日本社会福祉弘済会が発足し、日本で廃棄される車いすを修繕してアジア諸国で車いすを必要とする人々に届ける支援事業である。この活動には全国約35校の工業高校を中心に、大学、ボランティア団体等40以上の団体が参加している。本学の「Flying Wheelchair Supporters(以下FWS):空飛ぶ車いすサークル」は2007年発足より諸外国での活動に参加し、車いすの利用者や施設への寄贈、使用・修繕方法を伝達している。

今回、FWSは8月23日から28日まで6日間にわたって、タイ王国でのボランティア活動に参加し、従来の車いす修繕・寄贈に加え、医療福祉に携わる学生として車いすの適合、使用・介助方法を伝達することを目的とした。

【活動概要】

今回の参加者は、日本から日本社会福祉弘済会、浮羽工業高校、新潟工業高校、神奈川工科大学、本学FWSの5団体と日本人ボランティア、海外からは韓国・台湾・タイ人ボランティアなど総勢51名であった。車いすは、事前に16団体が国内での修繕活動に参加し、136台をコンテナ船で輸送した。また、当日に手荷物として航空機へ持ち込んだ33台を含め、合計169台を寄贈した。コンテナ輸送では輸送中の衝撃により不具合が生じるため、現地にて修繕活動を必要とし、2日間にわたって現地ボランティアへの技術支援を兼ねて調整した。車いす寄贈の内訳は、カンチャナブリ病院に96台、スラムの僧侶に2台、タイ障害児財団(FOUNDATION FOR CHILDREN WITH DISABILITIES)に15台、forOldy(高齢者支援団体)に9台、サハタイ財団に4台、パトゥンタニ県労災リハビリセンターに8台、その他病院に8台、廃棄・不明が6台であった。

多くの施設には寄贈のみであったが、カンチャナブリ病院では、対象者の要求、利用環境・目的、身体の状態に適切した車いすの選択および身体への適合評価を行った。適合評価項目はアームサポート・フットサポート・バックサポートの各高さ、座シートの座幅と奥行、圧迫箇所等とした。また、今後における活動方針の参考と適合技術修学のための情報、対象者の属性を把握するために①年齢、②性別、③疾患、④車いすの使用目的、⑤寄贈した車いすの種類5項目について調査を実施した。

【結果】

カンチャナブリ病院に寄贈した96台のうち、FWSが車いす

の適合を実施した対象者の属性と車いすの種類について表1に示した。

対象者は52名(男性27名、女性25名)であった。車いすの種類の内訳は介助用が29台、自走用が23台であった。介助用は脊髄損傷や脳血管障害など、麻痺を呈した対象者に多く寄贈した。自走用は外傷等による下肢切断や廃用症候群の対象者に多く寄贈した。

表1. カンチャナブリ病院における対象者の属性と車いすの種類

	介助用(n=29)	自走用(n=23)
下肢切断	1	3
脊髄損傷	3	2
脳血管障害	5	3
廃用症候群	4	5
脳性麻痺	1	1
その他	4	6
不明	11	3

【活動の評価と課題】

今回の活動から、寄贈した車いすは自走用に比べて介助用の割合が高いことが判明した。また自走用を寄贈したが、介助用の車いすを希望する対象者およびその家族が多く見られ、その中でもリクライニング型を希望する割合が高かった。しかし、日本で破棄され収集される車いすは自走用の割合が高いため、対象者が希望する車いすの種類を提供する事が難しい。そのため、今後の課題として介助用およびリクライニング型の車いすの集積率を高める事が必要である。

適合技術における課題として、タイ人は日本人に比べて下肢が長く、フットサポートの高さ調整だけでは適合させることが難しいことが挙げられた。そのため、事前の準備として簡易的なクッションを製作するなどの対策が検討された。

また、リクライニング型や脚部のエレベーター機構等の機能付き車いすは少数であったが需要が高く、障害程度に関わらず提供してしまったため、本来提供しなければならぬ重度の障害を持った対象者へ提供する事が出来なかった。

これらのことから適合技術の向上と適合方法の確立、各疾患と車椅子の機能に関する知識の修得および理解が必要であることが再認識させられた。

【まとめ】

今回の活動で得た経験や情報から、私達FWSとしての今後の具体的な課題を認識することができた。従来の活動では、車いすの修繕と寄贈のみを目的としていたが、今回は適合までを目的として活動を行った。それにより、「空飛ぶ車いす」におけるFWSの役割を確立することができた。今後は今回得られた体験を通して見識を深め、支援活動を展開するとともに貢献して行きたい。